

もう一つの啓蒙論文

——カント『思考の方向を定めるとは何を意味するか』をめぐる諸問題——

福田 喜一郎 (子ども心理学科・教授)

Eine andere Aufklärung-Schrift

Immanuel Kant: Was heißt sich im Denken orientieren? 1786

Fukuda, Kiichiro

Zusammenfassung

Kant stand nach seiner Aufklärung-Schrift (1784) verschiedenen Schwierigkeiten gegenüber. Seine Unterscheidung zwischen dem öffentlichen Gebrauch und privaten Gebrauch der Vernunft wurde von Hamann streng getadelt. Kant wurde danach in den Spinoza-Streit zwischen Jacobi und Mendelssohn hineingezogen und für Atheisten gehalten. Ferner gab es heftigen Angriff der Schwärmer auf die in Berlin entwickelte Aufklärung. Kant hat in dieser Phase seine Orientierung-Schrift (1786) geschrieben, um die Idee von seiner Aufklärung in praktischer Absicht zu erklären. Seine Idee wurde neu als "Selbstdenken" vorgelegt, dessen Maxime heisst: "den obersten Proberstein der Wahrheit in sich selbst suchen".

Schlüsselwörter: Aufklärung, Schwärmerei, Spinozismus

キーワード: 啓蒙、狂信、スピノザ主義

はじめに

カント (Immanuel Kant 1724-1804) は、1786年に『思考において方向を定めるとは何を意味するか』(以下『方向論文』と略記) という、非常に珍しい哲学的テーマを扱った論文を書いて、『ベルリン月報』に寄稿した。思考の方向決定という問題は、3 批判書のいずれにおいても取りあげられていない。一見、カントの哲学体系の展開において突如として現れてきた問題のようだが、その内実は彼を取り巻くドイツ哲学思想界と彼自身のそれまでの主張と密接な関係にある。

本稿の目的は、カントに『方向論文』を書かせるよう促した思想的背景を考察し、カントがいかに

に自らに与えられた批判をかわして、「理性信仰」という新しい立場を提示しているかを示すことである。その際私は、『方向論文』がカントの啓蒙理念の革新を明確化したものと解釈し、その意味で「もう一つの啓蒙論文」と見なしうる可能性を探ってみたい⁽¹⁾。

1 カントの啓蒙論文

カントは『方向論文』の2年前の1784年12月に、同じ『ベルリン月報』に掲載された『啓蒙とは何か? という問いに対する答え』(以下、『啓蒙論文』と略記) という論攷を書いていた。これによってドイツ啓蒙が総括されたとも称される貴重な証言

である。

『啓蒙論文』は次のような定義を与えている。「啓蒙とは、人間の自分自身に責任のある未成年状態から抜け出すことである。未成年状態とは、他人の導き (Leitung eines anderen) がなければ自分自身の悟性を用いることができないことである。この未成年状態は、その原因が悟性の欠如ではなく、他人の導き (Leitung eines anderen) がなくとも悟性を用いる決断や勇気の欠如にあるならば、自らの責任である」(Ⅷ35)。

そしてカントは、こうした啓蒙を促進するのは、あらゆることがらにおいて理性を公的に使用する自由だと考えた。理性の公的使用とは、「学者として読者世界という全公衆を前にして理性を用いること」(Ⅷ37)である。たとえば当時台頭してきた多くの月刊誌などのメディアで論議を展開することであり、「著述家 (Schriftsteller)」がその担い手となる。著述業は当時まだ生計を支える生業の地位を得ていなかったが、ドイツ啓蒙思想の文脈では、「著述家」は同時に「学者」であった。それに反して理性の私的使用は、特定の公務に就いている者が公務の内部で行使する自由であり、公的な目的を実現するために一定の制限を受けなくてはならない。そこには「内輪の (häuslich = privat)」定款があり、これに服従する市民がいるのである。

理性の公的使用における自由は、公職に就いている市民の立場を越えて世界市民の見地から無制限に実現されるべきである。そのとき市民は、社会の受動的構成員であることを脱却し、論議する公衆として能動的に語るゼルプスト・デンカー (自分で考える人) となるのである。このときこそ、啓蒙の標語「自分自身の悟性を使用する勇気をもて！」(Ⅷ35)が妥当するときである。

カントは啓蒙の主眼点は宗教的なことがらにあると述べていた (Ⅷ41)。宗教上の未成年状態が最もやっかいな問題だと考えられていたからである。そもそも「啓蒙とは何か」という問い自身が、『ベルリン月報』の編集者であるビースター (Johann Erich Biester, 1749-1816) が書いた論文『婚儀を執り行う際にもはや聖職者を煩わさない

ようにする提案』(1783年5月)が引き起こした議論がきっかけとなったものだった。彼は、婚礼の儀式の契約も他の制度と同様に、もはや宗教によって執り行われる必要はない、と主張し、「啓蒙された人々にとっては、あらゆる儀式が不必要である」⁽²⁾と付け加えたのだった。

こうした主張に対して聖職者ツェルナー (Johann Friedrich Zöllner, 1753-1804) が婚姻はその特殊な性質のゆえに、またその格別な重要性のゆえに、何か他の市民的契約以上の承認を与えるべきであると主張し、しかもビースターの論文を批判して「啓蒙の名の下に人間の頭と心を混乱させる」と書いたときに、次の注を加えたのであった。「啓蒙とは何か? この問いは、真理とは何かという問いとほぼ同様に重要であるから、啓蒙を始める前に回答されるべきだろう! そして私はこの問いがいままで回答されているのをどこにも発見したことはない!」⁽³⁾

こうした宗教的議論の背景はドイツ啓蒙を考える上で重要である。そしてもう1点加えるならば、カントとプロイセン国王との精神的関係である。彼は、時代を「フリードリヒの世紀」(Ⅷ40)とも表現した。カントによれば、フリードリヒ大王は「好きなだけ、そして欲する内容について論議せよ。ただし従え！」(Ⅷ41)と述べていたからである。

実は、このカントの定式化に関しては、似た主張が先行する論文で展開されていたのである。1784年4月に『ベルリン月報』に掲載された『思想と印刷の自由について 諸侯、大臣、文筆家に宛てて』(Ernst Ferdinand Klein著)という論文は、次のように書いている。「プロイセンの軍隊の誰も抵抗できない力は服従に基づいている。プロイセンの文民身分の中を支配している秩序は、服従に依存している。服従はプロイセン全国家の魂である。一方でこれほど不可欠だが他方でこれほどやっかいな服従は、声を出して考える自由によって和らげられるが、阻止されることはない」⁽⁴⁾。これはカントによる理性の公的使用と私的使用の区別に先行する議論と解することができる。またそれは同時にプロイセン国家ひいてはプロイセン

国王の統治の定式化でもあった。

2 ハーマンの批判

カントの啓蒙論文を早々と批判した重要なテキストの1つは、ハーマン (Johann Georg Hamann, 1730-88) が、1784年12月18日に友人のクラウス (Christian Jacob Kraus, 1753-1807) に宛ててしたためた書簡の中に見ることができる。ケーニヒスベルク大学教授となったクラウスは、後にカントの食卓の常連になった人である。

ハーマンは、「自らの責任である (selbstverschuldet)」という理解しがたい「新造語」を「忌々しい形容詞だ」と言って批判する。彼は、能力の欠如はその人の罪ではないと言いたいのである⁽⁵⁾。彼はさらに興味深い指摘をしている。カントが啓蒙を定義する際に「他人の導き」という表現を「匿名で」2箇所を用いているが、いずれにおいても「他人」を不定冠詞で表現している。ハーマンの問いは、この他人はいったい誰のことなのかという批判となって展開される。ヴァイゲルによれば、ハーマンはカントが「ある他人」ということでフリードリヒ2世やカント自身を示唆しているようである⁽⁶⁾。フリードリヒ2世もカントも後見人の地位にしながら、一般大衆には決断も勇気もないと批判しているのである。すなわち、後見人が未成年者の無能力をその人自身の責任だと判定して、自分自身は啓蒙を遅らせている責任から免れているのであった⁽⁷⁾。

ここで啓蒙に、国家もしくは民族の啓蒙と個人の啓蒙の2種類が想定されていることにも言及しておきたい。『啓蒙論文』では、個人の啓蒙は困難だが、集団の啓蒙はそこに啓蒙されている人がいれば実現が容易であると考えられていた。啓蒙された人が他の人に少しずつ影響を与えてゆくと期待できるからである。いずれにしても、未成年状態もしくは啓蒙されていない状態を自己責任として定式化したのは、カントが初めてだったと言えよう⁽⁸⁾。

ここではむしろハーマンのもう1つの批判が重要である。彼は理性の公的使用と私的使用の区別に、エリート学者の議論と一般民衆の生活実態と

の乖離を直観している。それを理解するためにはケーニヒスベルクの市民生活の現状を知る必要がある。ヴァイゲルが次のように説明している。関税事務所に翻訳家として勤務していた彼は、フランスから導入された間接税の制度によって市民が困窮の生活をしているのを知っていた。フランス人の税官吏、国境警察などが、地域の税務署に代わって主導権を取り、国家は彼らに給料をはずんでいた。さらに彼らは、無制限の権限を有していて、現地の市民を搾取 (税金ゆすり) していた、というのである⁽⁹⁾。ハーマンは次のようにも述べていた。「自宅では奴隷の上っ張りを着ているのに、自由の式典服がいったい私に何の役に立つのだろうか。(……)。理性の自由の公的使用は1つのデザート、おいしいデザート以外の何ものでもない。私的使用は、このデザートにとってなくては寂しく思うべき毎日のパンである」⁽¹⁰⁾。

確かに、世界市民的見地において読者界を相手に論議する学者は、自分の悟性を用いるゼルプスト・デンカー (啓蒙の実現者) かもしれないが、文筆家は当時はまだ著述によって生計を立てられるほどの地位を獲得しておらず、領邦国家によって設立されているドイツ的大学のプロフェッサーのような地位の者だけが理性の公的使用が可能である。したがって、宗教上の啓蒙がカント的啓蒙の中心に据えられているならば、特権的地位を得ていない市民が与る信仰上の啓蒙は覚束ないと言わなければならない。

信仰や宗教という18世紀ドイツにおいて最も重要な問題は、学者の議論の重要な課題であるが、それに尽きるものではない。この問題はやがてカントによって、知識と信仰、理性信仰と歴史的信仰、哲学部と神学部の争いなどの問題として展開されてゆくのであった。

3 ヤコービとレッシングの会話

カントの『啓蒙論文』が出た翌年の1785年、ドイツ哲学思想界は1つの重大な報告を受けることになった。ヤコービ (Friedrich Heinrich Jacobi, 1743-1819) が『スピノザの学説についての、メンデルスゾーン氏宛ての書簡』を出版し、彼がレ

ッシング (Gotthold Ephraim Lessing, 1729-81) と交わした「親密な会話」の詳細を暴露し、メンデルスゾーン (Moses Mendelssohn, 1729-86) 宛ての書簡も彼には知らせずに公開してしまったのである。

その報告は、レッシングがスピノザ主義者だったという醜聞であった。1781年にヤコービはレッシングを訪れ、スピノザ哲学の議論をしているうちに、レッシングの口からスピノザ主義者と見なしてよい言質を引き出すのに成功した。すでに劇作家として一流の地位を獲得していたレッシングが、無神論の代名詞であるスピノザ主義を支持していたとするならば、当時の知識人にとっては驚きであり、特に親交のあったメンデルスゾーンには信じがたい事実であった。

1775年のヴァルヒの『哲学事典』⁽¹¹⁾によれば、一般にスピノザ主義は、神と世界を同一事物(実体)と考えたために無神論だと理解されているものである。これは18世紀ドイツにおけるスピノザ理解の基本であろう。この事典はさらに、スピノザ主義を「1つの誤謬」と断定すると同時に、スピノザ主義が非常に多くの著作において論駁されていると述べている。

またこの事典は、ヨーハン・ゲオルク・ヴァハター (Johann Georg Wachter) という人物のスピノザ批判を取りあげている。彼は『ユダヤ教のスピノザ主義、もしくは今日のユダヤ教とその神秘主義カバラから神化された世界』(アムステルダム、1699年)という著作で、あらゆる存在が神の存在からの流出ととらえている点で、スピノザの誤謬がユダヤ教のカバラに基づいていることを証明しようとしていた。

ヤコービは当時有名なヴァハターのスピノザ解釈を知っており、次のように述べている。「カバラ主義の哲学は、その研究が公になっている限りで、またその最良の注釈者であるヘルモント・ジュニアとヴァハターに従うならば、哲学としては未熟なもしくは新たに混乱したスピノザ主義に他ならない」⁽¹²⁾。またレッシングがヤコービに「あなたがスピノザ主義の精神をどのように考えていますか」とたずねたとき、ヤコービは「それ

はおそらく、無からは何も生じない、という昔からのものに他ならなかったでしょう。スピノザはこれを、哲学的なカバラ主義者や彼以前の人たちよりも抽象的な概念にしたがって考察したのでした」⁽¹³⁾とも語っている。

ヤコービとレッシングの会話では、スピノザ的合理主義もしくは真の哲学は最終的に無神論的汎神論に帰結するという理説が展開され、ヤコービは巧みな論述でレッシングがスピノザ主義者であると断定しうるような発言を導いたのだった。またヤコービはカントに言及し、『純粋理性批判』(第1版1781年、第2版1787年)の或る一節と論述形式の似ているスピノザのテキストを並べて紹介し、それが「スピノザの精神」で書かれていると主張している⁽¹⁴⁾。すなわち、カントにまでスピノザ主義の嫌疑をかけたのである。

さらにシュッツの1786年2月カント宛書簡は、ヤコービがカントの空間の議論を引用して、それがまったくスピノザの精神で書かれているために、カントが無神論者だと考える人が多いと伝えている(X 430)。カント自身にはこうした報告に対して直接反応している形跡はない。しかし、レッシングがスピノザ主義者か否かをめぐる議論は、やがて汎神論論争に展開しドイツ観念論の哲学者たちをも巻き込んでゆくのであった。詩人のハイネ (Heinrich Heine, 1797-1856) は、『ドイツ古典哲学の本質』(執筆時期は1833年~34年)の中で、ドイツ哲学革命の先駆者としてスピノザとレッシングの名前をあげているほどである。彼はスピノザを「今日のドイツでは思想界の唯一つの支配となった男」⁽¹⁵⁾と評し、「ルター以後のドイツはゴットホルスト・エフライム・レッシングほど偉大で、りっぱな人物はうみださなかった」⁽¹⁶⁾と述べている。カントが関わるのは、こうした評価に先行する時期のヤコービである。

4 メンデルスゾーンの『朝の授業』

『方向論文』はヤコービの議論と同時に、メンデルスゾーンの主張をも取りあげる。ここでヤコービとメンデルスゾーンの思想的文脈を確認しておきたい。ヤコービはレッシングとの会話を公に

する前に、すでにメンデルスゾーンにその会話の詳細を知らせていた。レッシングの親友であるメンデルスゾーンはレッシングに対するスピノザ主義嫌疑からたいへんなショックを受け、さっそくレッシング擁護の文章を書き始めるのであった。

メンデルスゾーンは『フェードンもしくは魂の不死性についての3つの会話』(1766年)という著作でたいへん高い評価を受け、1人の偉大な哲学者としてドイツ思想界で受け入れられた。書籍商かつ出版業者のニコライ(Christoph Friedrich Nicolai, 1733-1811)によって出版されたこの本は「ブック・オブ・ザ・イヤー」と称されたほどである。しかしながら、メンデルスゾーンは1783年に公刊した『イェルーザレム、あるいは宗教的権力とユダヤ教について』という著作でユダヤ教を全面的に論じ、自らがユダヤ教徒であることを公に告知したのであった。しかもそれは自らの理性に従ったことだったのである。すなわちユダヤ教は理性に従って合理的に説明できる宗教だというのである⁽¹⁷⁾。

メンデルスゾーンはレッシング擁護を目的の1つとした書物を、1785年に『朝の授業、もしくは神の存在についての講義、第1部』(以下、『朝の授業』と略記)というタイトルで公刊したが、ここではヤコービとレッシングの会話にはいっさい言及せず、スピノザ主義と汎神論について自分の見解を述べた。展開されたのは「純化された汎神論」という新しい汎神論解釈であり、無神論=汎神論とは異なる立場であることが主張された。

さらに、この『朝の授業』は、18世紀という啓蒙の時代に特有な課題、すなわちわれわれの精神が思想においてよりどころとすべきは何かという問題に、1つの明確な指針を示そうとしていた。メンデルスゾーンは神の存在証明を議論した後で、自分が見た寓意的な夢を紹介している。それはおよそ次のような内容であった⁽¹⁸⁾。

彼はアルプス山脈を旅していたとき、2人のガイドを連れていた。1人は身体ががっちりしているがあまり優れた理解力を持ち合わせていないようなスイス人男性であり、もう1人は背が高く痩せていて、伏し目で狂信的な容貌の女であった。

彼女は頭の後に羽のようなものをつけている。この2人に従って歩いていると、分かれ道に来たが2人の意見は相違し、男は急いで右の道を進んで行き、女は羽を利用するがごとくひらひらと左の道を飛んでゆくのであった。そこでメンデルスゾーンは狼狽してどうしていいかわからないでいると、彼らの方に悠然と歩いてやってくる中年婦人が目に入った。

この婦人は、ガイドの男が「共通感覚(Gemeinsinn, *sensus communis*)」で、女が「思弁(Beschauung, *contemplatio*)」であることを明かした。彼女によると、両者はたいした理由なくして仲違いするが、誰も2人についてゆかない場合は元の場所に戻ってきて、この中年婦人に決定を下させるのであった。たいていは男の方が正しく、女は忠告を受け容れるが、女の方が正しい場合は男がなかなか自分の意見を譲ろうとはしないそうであった。そしてこの中年婦人は自分の身分を明かして、現世では「理性(Vernunft)」と呼ばれていると言った。

ここで彼女の話は恐ろしい騒音で中断されてしまう。狂信的な群衆が思弁の女性の周りに集まってきた。共通感覚も理性も追い払おうとし、叫び声をあげて荒々しげにメンデルスゾーンらのところに迫ってきた。そこで皆が驚愕すると、彼は夢から覚めるのであった。

メンデルスゾーンは、共通感覚、思弁、理性という三者の判断能力の役割をこの夢の寓意で語っているが、それらの役割は必ずしも明確ではない。3者の全体が「健全な理性(*gesunde Vernunft*)」の働きであり、道に迷ったときに従うべきもの、すなわち思考の方向を定めるものとして提示されている。もしくは、健全な理性が、狂信や迷信に打ち勝つものとして、また宗教に関わるものとも一致する能力として理解されているのである。

彼の寓意的な夢は、神の存在証明根拠をめぐる議論の直後に提示されている。カントは、経験の範囲を超えたことに関して、私たちがその思想の方向を決定する場合は、何を導きの糸にすべきかと問題を定式化しているが、問題の本質は同じだ。これまでの『方向論文』の研究はこの寓意的

夢には言及していないが、私は、カントの『方向論文』の課題は、直接にはまさしくこのメンデルスゾーンの寓意的夢に触発されたものと考えている。

私たちはここで神の存在という時代に固有な問題を見いだすが、現代ではこれを世界観や人生への態度決定という問題と置き直して考えてよいであろう⁽¹⁹⁾。無神論的ニヒリズムという問題も、価値ニヒリズム⁽²⁰⁾という現代的問題と捉え直すことができる。そのとき、私たちの精神的態度決定は、何を指針とすべきであろうか。カントはここで、無神論的ニヒリズムに対して、理性信仰という彼固有の信（仰）の立場を全面的に主張するのであった。その際、それぞれ異なる思想を展開したヤコービとメンデルスゾーンは、カントにとっても最も対極にある思想であり、しかも後に見るように、「狂信」という点ではヤコービとメンデルスゾーンは同質の思想であり、彼らこそ無神論に門戸を開くものだと考えられたのである。

5 ヴィーツェンマンの『帰結』

カントが『方向論文』を書くきっかけとなった人物に、もう1人トーマス・ヴィーツェンマン(Thomas Wizenmann, 1759-87)という若き哲学者がいる。彼は匿名で『ある志願者によって批判的に吟味された、ヤコービとメンデルスゾーンの哲学の結論』(1786年)を著し、メンデルスゾーンの議論を批判し、さらにカント批判も展開している⁽²¹⁾。

彼によれば、メンデルスゾーンは「理性根拠に基づく確信」以外の確信を認めず、ヤコービの結論は「あらゆる人間的認識と活動のエレメント」は信仰だということで、両者の結論はこの上ない対照をなしている。そして彼は、一方が他方を排除する関係にあると見なし、両者の立場が哲学(史)上でもつ意義を主張している。彼は、「これまでに信仰と哲学に関する問題が、これほど深く把握され、考察の場に立てられたことはなく、両方のサイドから、その第1の原理に至るまで探求し、事細かに説明されえたことはなかった」⁽²²⁾と書いている。この問題は宗教上の長く続いた諸

論争の根底にあるのだから、今や根本的にこれを理解して、不幸な論争に終止符を打たなくてはならない。そして少なくともこの問題に息吹を与え実りあるものにしたのは、ヤコービの功績だ。このようにヴィーツェンマンは述べている⁽²³⁾。

ヴィーツェンマンは、メンデルスゾーンの立場(神の存在を理性根拠に基づいて証明しうることを)を批判しながら、同時にヤコービの立場(神の存在の真なる確信は信仰にあるということ)にも与せず、人間の精神的営みの歩みを示している聖書と、単なる哲学的認識とは本質的に異なる人類の歴史をよりどころとする立場を表明している。

また次の指摘も重要だ。メンデルスゾーンが思考の方向を定める際に依拠している健全な理性は、最終的には、証明されていない理性の表明に確信を抱くだけであって、これはヤコービの信仰哲学と本質的に相違はない、というのである。「メンデルスゾーンの哲学との関連では、人間的認識のエレメント、その源泉、その明証性は信であり、これは文書や書籍に対する信ではなく自然の声に対する信である」⁽²⁴⁾。すなわち、その内実は異なっているが、両者ともに一定の確信もしくは信（仰）に根拠を求めているのである。実は、カントもこれと似た見解を示している。後に見るように、彼はメンデルスゾーンもヤコービもそれぞれの根底に狂信がある、と見なしたからである。いずれにしても、ヴィーツェンマンが投げかけた両者に対する批判は、当時の思想的文脈からして非常に新鮮なものであった。彼はヤコービとメンデルスゾーンの論争に新たな火種を投じたのであり、カントは彼を「鋭敏な頭脳」と形容し、信仰の問題についてあらためて刺激を受けたのだった。

6 哲学的狂信

カントが『方向論文』の中で取りあげている同時代人は、これら3人であった。中でも注目しているのはヤコービである。ここで彼の周辺の著述家たちが、ヤコービに対する見解をカントにどのよう示していたかを考察したい。

当然のことながら、メンデルスゾーンはヤコー

びを酷評する手紙をカントに送っている。1785年10月16日付けの書簡の最後は、次のように結ばれている。「私が恐れるのは、哲学が既成宗教の狂信者とまったく同じように非常に荒々しく迫害を行い、さらに既成宗教の狂信者以上に改宗者を作り上げることに舵を取られているような狂信者もっていることです」(X414)。

次にカントはビースターからの、同年11月8日付けの書簡で、「哲学的狂信について一言述べのをどうか忘れないで下さい」(X417)と頼まれている。これがヤコービのことを意味しているのは明らかである。

さらに、カントの聴講者であったユダヤ人学生マルクス・ヘルツ (Marcus Herz, 1747-1803) は、1786年2月27日付けのカント宛て書簡で次のような状況報告をしている。「モーゼスの死以後、僧侶や天才、悪魔祓いや滑稽な詩人たち、狂信者と音楽家の中で、彼の死をめぐる騒乱があります。あなたはいったいこの騒乱をどう思いますか。これはピンペンドルフの枢密顧問官が合図を送ったものなのです」(X432)。ヘルツも狂信者に言及しているが、その際狂信者が僧侶や天才などさまざまな人物と同様に扱われているのは注目に値する。「ピンペンドルフの枢密顧問官」というのはヤコービのことである。

実は、メンデルスゾーンはヤコービとの論争を展開したとき、かつて苦い思いをした別の論争を思いだしていたはずである。それは神学者のラーヴァーター (Johann Casper Lavater, 1741-1801) が彼に、公的に「キリスト教を論駁するかキリスト教に改宗するか」と詰問してきた事件であった。メンデルスゾーンはこの要請を回避して、『チューリヒの助祭ラーヴァーター氏宛て文書』(1769年)で次のように書いた。「しかし私は自分の宗教の本質的なことに関しては、あなたかボネ氏がいつもご自分の宗教に関して抱いているのと同じくらい、揺るぎなく反論の余地のないほど確信しています。そして私はこれに関して、真理の神の前で、またあなた方が書状で私に懇願したときのあなた方と私の創造主かつ維持者の前で、私は私の魂全体が別の性質を受け容れることのない限

り、私は自分の諸原則にとどまるつもりだと誓います」⁽²⁵⁾。彼はこの文書でラーヴァーターとの論争から解放されたいと思い和解を申し出るが、ラーヴァーターはその後も執拗に意気阻喪のメンデルスゾーンに議論を突きつけ彼の精神を疲弊させてゆくのであった。友人のレッシングはこの論争においてメンデルスゾーンにたいへん同情し、ニコライ宛の書簡で、彼がラーヴァーターに圧迫を受けているのを気の毒に思うと書いたとき、ラーヴァーターのことを「狂信者」と呼んだ⁽²⁶⁾。

実は、狂信 (内的主観性への方向) は迷信 (外的形式への硬直化) と並んで、ドイツ啓蒙運動がその一掃に努めてきた人間の性癖 (の現れ) であった。シュナイダースによれば、狂信はすでにルター (Martin Luther, 1483-1546) が「再洗礼派、心霊主義者、改革の左翼の代表者」らに対して用いていて、それ以来、教会の外部の特殊な集団に属する者、公的な宗派に反対して私的な啓示を引き合いに出す者、公の秩序を乱したり転倒させようとしている者たちを意味するようになった⁽²⁷⁾。すなわち、狂信概念はもはや宗教的意味に限定されず、非合理主義者や病的な人物の現象、さらに「野卑で、愚かで、馬鹿げた思いつき」に関連づけられて用いられたのである。先に引用したヘルツの言葉は、この広い意味での狂信を意味していたのである。

ちなみにこのような用語法は、ドイツ啓蒙において次の3つの機能を果たしていたと指摘されている。まず、扇動や喧噪が狂信と称されるとき、警告信号として人々の意識を目覚めさせる機能、第2に、自分では理解のできないそうした動き全体を総括してレッテルを貼る機能、第3に、最初から他者をそうした動きから遠ざけさせておく機能である⁽²⁸⁾。これらの意味において、狂信は啓蒙運動の「戦闘思想 (Kampfidee)」だったのである。

7 ベルリン啓蒙批判

いよいよ時代はカントに対して自己弁明を要求してきた。ヤコービの「ベルリン的思考法 (Berlinische Denkungsart)」に対する批判、すなわ

ちベルリン的啓蒙思想に対する批判は、当事者たちを翻弄するように激しさを増してきていた。ピースターは1786年6月11日付けのカント宛の書簡で、少し大げさだと思われるが、「現在、狂信(Fanatismus)がすでにヨーロッパの半分を混乱に陥れ、粗野で馬鹿げた独断的無神論が喝采を浴びて教えられている時代です」(X454)と書いている。

18世紀末のベルリンはドイツ啓蒙の中心地であると同時に思想の自由に制限のない場所と考えられ、多くの思想家が集まってきていた。たとえばハイネは次の人たちの名前を挙げている。「メンデルスゾーン、ズルツァー (Johann Georg Sulzer, 1720-79)、アプト (Thomas Abbt, 1738-66)、モーリッツ (Karl Philipp Moritz, 1757-93)、ガルヴェ (Christian Garve, 1742-98)、エンゲル (Johann Jakob Engel, 1741-1802)、ピースター」⁽²⁹⁾。私はさらにレッシングとニコライとをこれらに付け加えたい。これら一群の人たちが有していた特定の思想傾向が「ベルリン的思考法」と称されていた。ハイネはその思想傾向を次のように説明している。「宗教上では合理主義者であり、政治的にはコスモポリタンであり、道徳的にはまず何よりも人間であり、自分には厳しくて他人にはおおまかな、気高い、徳のたかい人間」⁽³⁰⁾。

実は、ヤコービはこの一群の人たちの思想運動に偽善的傾向を見いだしていたのである。安酸敏眞は次のように解釈している。「ヤコービにとってベルリンの啓蒙主義者たちは、知的専制と教条主義の権化のような存在であり、自由や寛容の理想を掲げながらも、道徳的、宗教的、政治的な既成勢力に安易に迎合する偽善者であったからである。彼らは真理追究とか学問研究の自由とか言いながらも、つまるところは一般大衆の教育、社会福祉の推進、国民の文化的向上といった功利的目的(つまりは啓蒙のプログラム)を追求する通俗哲学者である」⁽³¹⁾。そしてヤコービにとって彼らの代表がメンデルスゾーンであった。ピースターの証言によると、ヤコービはベルリンにおける「メンデルスゾーンの神格化」(X454)について言い立てていたのである。

さらにピースターは、次のようにも述べている。「はなはだ奇妙なのは、いろいろな外部の人間がしばらく前からベルリン的思考法について述べていることであり、ヤコービ氏がこの上ない憤懣と申し分なく品位を落とす表現で述べていることです」(X454)。「すでに述べたように、たとえばモーゼス・メンデルスゾーンとベルリンがもちこたえようが倒れようが、かまいません！私はただ真理と理性があればほど目に見えるように危険にさらされるのは望みません。気取った天才的狂信家がこうしたことをあれほど自惚れて、高慢ちきで、独裁的な仕方ですするならば、(後略)」(X455)。この主張の中にメンデルスゾーンを代表とするベルリンの啓蒙主義者たちとヤコービの関係を見て取ることができよう。

ヤコービはさらにメンデルスゾーンの合理主義的な宗教解釈を許すことができなかつたのである。彼は、スピノザ主義こそ真性の哲学であり、またあらゆる合理主義の哲学はスピノザ主義に還元されると主張していた。そしてそれは真性の宗教とは縁遠いものと考えていた。彼はスピノザ主義を総括するときに第1のテーゼとして「スピノザ主義は無神論である」と書いた。そしてこのテーゼの脚注で次のように述べている。「正しく理解されたスピノザの教説はけっして宗教の類を許すものではない。それとは反対に、スピノザ主義の泡は、あらゆる類の迷信と狂信と非常に一致するものである。われわれはそれによって最も美しい泡を投げることができる」⁽³²⁾。ここでヤコービは、真性の哲学=スピノザ主義が迷信と狂信と一致すると述べている。もはやどの陣営も、自分に反する立場に迷信もしくは狂信というレッテルを貼っていたのである。

カントはこうした背景をもちながら『方向論文』に着手した。課題は複雑である。自分のスピノザ主義嫌疑を晴らすこと。ヤコービとメンデルスゾーンのそれぞれの誤謬を正すこと。何が狂信かを有罪判決すること。理性の真性の立場を明確にすること。放縦な自由に対して真性の自由を確保すること。なお、彼は啓蒙をプロイセン国家と結びつけて定式化したのが、啓蒙の促進を許したフリー

ドリヒ大王は1786年8月に死去し、新しい国王フリードリヒ・ヴィルヘルム2世は反動的で啓蒙思想にけっして同調的ではなかった。これもカントが啓蒙の意義を再確認する必要性を感じた理由の1つであろう。そしてこれらすべてが、思考において方向を定めるという議論に収斂させられていたのである。

カントによれば、スピノザ主義は純粋な悟性概念から成り立っている観念の存在者（神）の必然性を「洞察する」と主張するが、感性のすべての条件を捨象した独断論であり、また悟性の限界を超え出るがゆえに狂信にまっすぐ突き進む哲学である（Ⅷ143）。また彼によればメンデルスゾーンの証明も同様であり、理性使用のために何かを前提しなくてはならないという主観的根拠を客観的根拠すなわち「必要」を「洞察」と見なしている。そして、超感性的なものの領野において純粋理性を伴った独断化は、哲学的狂信へのまっすぐな道だというのである（Ⅷ138）。

カントはここで自由について非常にきわどい議論を展開している。それは自らの啓蒙理念と密接な関係にある。次に、自由と啓蒙についてのカントの議論を確認して（カント的啓蒙に対する批判への弁明の考察）、最後に彼の根本的立場である理性信仰を取りあげたい。

8 最上の真理の試金石

カント的啓蒙は自由（理性の公的使用）によって促進されるものだったにも関わらず、カントは『方向論文』において「自由の崩壊」という議論を展開している。それは、思考の自由のまちがった観念からどのような事態が生じてくるかを提示するものだった。

思考の自由は次の3者と対立する。まず第1に、他人に自分の思想を伝達する自由を拘束する「市民的強制」である。自分の思想を公に伝える自由が奪われるならば、思考の自由そのものも失われてしまうのである。

第2に、人間の宗教的心情に働きかけてくる後見人による拘束としての「良心の強制」である。この強制が働く場合、仮に外的権力がなくとも各

自は理性による吟味を放棄してしまうのである。

第3に、理性が自らに課する法則をも放棄した場合に生じる理性の「無法則的な使用」である。これによって、理性の活動そのものがストップしてしまい、思考の自由そのものが消えてしまうのである。

カントは、ヤコービ流のやり方が陥ってゆく「ことの成り行き」（Ⅷ145）を、この第3の思考の自由が消失してゆく過程として見ている。すなわち、理性の活動そのものを放棄して、感情や靈感に身を委ねるとき（狂信の始まり）、そこに一定の言葉を与えられて「迷信」が生じるのであった。

しかし人間理性は依然として自由を求めて、狂信や迷信の束縛から逃れようとするが、そこでも独断的確信に頼るならば、理性自身の必要（要請）にとどまることができず、思弁的理性の独裁か、さらに理性自身の必要（要請）からの独立という「理性的無信仰」を導いてしまうのであった。カントの狂信批判の本質はここにある。

メンデルスゾーンの哲学的狂信は、単に「理性洞察と知識の転倒」（Ⅷ143）に過ぎない。すなわち「思弁的理性の独裁」（Ⅷ146）という単なる過ちであるが、ヤコービに見られる狂信は「理性信仰の転倒」（Ⅷ144）だと判定される。これこそが真の「無信仰」（Ⅷ146）であり、スピノザ主義以上に「自由思想」（Ⅷ146）なのである。それは理性の存在そのものを否定するか、信仰を感情に基づかせて理性の機能を無効化するものであり、それが自由思想すなわち無神論に至る可能性を導くからである。ヴィーツェンマンは既述のようにメンデルスゾーンとヤコービの哲学が同質の基盤の上に成立していると述べていた。カントの議論の内実異なるが、彼が両者ともにスピノザ主義と同様に本質的に狂信だと判定しているのは、こういう意味においてである。

理性信仰の転倒としての無神論的思想は、いかなる義務をも認めないから必然的に社会に無秩序をもたらしてしまう。その結果最も深刻な事態が生じてしまうのだ。カントはここで当局（政府）の干渉を警告している。否、警告と言うよりは容

認である。そのときこそ自由は我と我が身を崩壊させてしまうというのである（Ⅷ147）。

こうした主張を展開した『方向論文』の末尾は、理性を「真理の最終的な試金石」（Ⅷ146）として提示して結び、これにやや長めの注を加えている。しかしそれは内容から判断して単なる脚注的な付随物ではなく、カントが啓蒙についての核心的な思想を再提示したものだ。しかも『啓蒙論文』に対する批判に対する反批判の意味をそこにこめて

「自分で考えるとは、真理の最上の試金石を自分自身の中に（すなわち、自分自身の理性の中に）求めることであり、常に自分で考えるという格率は啓蒙である」（Ⅷ146）。ここで用いられている「自分で考える」というフレーズは、ドイツ啓蒙思想において繰り返し用いられてきたものだ。しかしカントはこの啓蒙に関する定式化に制限を設けるのであった。すなわち、本来の啓蒙は「知識における啓蒙」を意味するのではない。むしろそのような啓蒙は認識能力の使用において消極的な原則となってしまうからである。

「自分自身の理性を用いるというのは、次のこと以上のことを意味しようとするものではない。すなわち、引き受けるべきあらゆることがらにおいて、何かを引き受ける根拠、もしくは引き受けることがらから帰結する規則を、自分の理性使用の普遍的原則とすることが可能かどうかを自分自身に問うことである」（Ⅷ146-7）。この格率の遂行には特別な学識は必要ではなく、むしろその勇氣や決断だけが求められるのであろう。その意味で、カントは啓蒙の格率の実践性を強調しているのである。

ここで、『啓蒙論文』で主張された理性の公的使用の重要性は影を潜めている。カントは、啓蒙が知識におけるものではないことを強調しているのだ。理性を公的に使用する者は、「学者」、「著述家」と称された知的エリートたちであるのに対して、『方向論文』が提示している啓蒙理念は教育の程度に依存するものではない。

啓蒙についてのカントのこの主張は、『単なる理性の限界内の宗教』（1793年）でも繰り返され

ている。そこでは、「肉によって知恵ある者」、学者、または屁理屈屋だけが本当の救済に関する啓蒙の任務を負うのではなく、「世の愚かな者」も、また無知な者や理解力に限界のある者でも、啓蒙や内的確信を要求できなくてはならないのだ、と述べられている（Ⅵ181）。またそこでは、正しい生き方と（後見人に強制されるような）歴史的信仰に基づいた偽奉仕との区別にこそ、「真の啓蒙の本質」がある、とも明言されている（Ⅵ179）。これらはカントの啓蒙に関する最終的な定式化である。

カントは『啓蒙論文』ですでに啓蒙の主眼点を宗教上のことがらにおいていたが、『方向論文』ではさらにその実践的確信である「信仰」に焦点を定めている。（理性）信仰そのものを堅持することは、「理性の自己維持の格率」（Ⅷ147）に従うこととも言い換えられている。これは、理性の存在が他のいかなる事実によっても証明することができないがゆえに、自らの存在を自己主張し続けること（ゼルプスト・デンケンの遂行）によってのみ主観的には充分確信される精神の営みだということである。しかも、この理性による啓蒙の実現は一人一人の主体においては教育によって可能となるが、それに対して外的な障害があるため1つの時代を啓蒙するには時間がかかるとまで主張されている（Ⅷ147）。これは『啓蒙論文』の主張とは異なる。カントはかつて集団の啓蒙よりも個人を啓蒙する方が困難だと述べていたからである。

理性の自己維持に対立する精神的営みは何であろうか。それこそ、「ことの成り行き」で述べられたような、無法則の自由すなわち無神論的思想（無信仰）である。もしくは、啓蒙の自己放棄と見なされる後見人依存または歴史的信仰である。歴史的信仰は、やがて『単なる理性の限界内における宗教』で詳しく展開される既成宗教批判、および『学部争い』（1798年）で展開される神学部問題へと結実していった。しかし、理性の自己維持によって実現される理性信仰は、その理論的演繹がなされていない。

理性信仰というカント独自の立場は、彼の「論

理学講義」においてマイヤー（Georg Friedrich Meier, 1718-77）の『論理学綱要』を用いて、判断における様相の1つとして繰り返し論じられていたのである。いよいよカントはこれを道徳性との関連で基礎づける 때가やってきた。実は、その重要な任務を担うのが『実践理性批判』（1788年）の第2編第2章第8節「純粹理性の必要に基づく意見」である。

理性信仰は論理学講義で繰り返し論じられていたが、自らの啓蒙理念に対する批判および無神論の嫌疑を回避するために『方向論文』において初めて明確に提示された立場である。これによって初めて「自分自身の悟性（理性）を用いる」、「自分で考える」というスローガンの本格的な意義が確立されたとも言えるであろう。そういう意味で『方向論文』は『啓蒙論文』への脚注という意味（もう一つの啓蒙論文）を担うと同時に、自らの宗教論の礎の端緒をなしている重要な論攷だったのである。

※カントからの引用はアカデミー版の巻数とページ数を記してある。

【注】

- (1) 本論文は次の研究に触発されて書かれたものである。Bernhard Jensen, Was heisst sich orientieren? Von der Krise der Aufklärung zur Orientierung der Vernunft nach Kant, Wilhelm Fink Verlag, 2003. 特にハーマンの批判については著者の主張に負うところが多い。これに対して本論文の特徴は、スピノザ主義をめぐる議論と狂信問題に焦点をあてて問題を考察したことである。
- (2) Was ist Aufklärung? Beiträge aus der Berlinischen Monatsschrift / in Zusammenarbeit mit Michael Albrecht ausgewählt, eingeleitet und mit Anmerkungen versehen von Norbert Hinske, 4. Auflage, Darmstadt, 1990, S.98.
- (3) Ebd., S.115.
- (4) Ebd., S.403.
- (5) Johann Georg Hamann, Briefwechsel, Band V, herausgegeben von Arthur Henkel, Insel Verlag, 1965, S.289.
- (6) エンゲルハルト・ヴァイグル（三島憲一・宮田啓子訳）『啓蒙の都市周遊』岩波書店、1997年、242ページ。
- (7) 自由の能力に関するこの批判に対するカントの見解は、間接的ではあるが宗教論の中で示されていると思われる。彼は、「ある民族や農奴が自由の段階にまで成熟していない」という表現を唾棄している。最初はいかに困難で危険であっても、理性は「自分自身の試み」による以外は成熟できない、と述べている（Ⅷ188）。
- (8) ドイツ啓蒙の代表的哲学者であるクリスチャン・トマージウス（Christian Thomasius, 1655-1728）は、先入観の原因すなわち権威を頼みにする人間の志操は、人間の「信じやすさ」や「性急さ」が原因であり、それぞれ「恐れ」や「未熟な羞恥心」「怠惰」によって促進される、とすでに主張していた。cf. Christian Thomasius, Einleitung zur Vernunftlehre, Ausgewählte Werke, herausgegeben von Werner Schneiders, Band 8, Georg Olms Verlag, 1998, S.304-309.
- (9) ヴァイグル、前掲訳書、245-247ページ。
- (10) Hamann, S.291-2.
- (11) Johann Georg Walch, Philosophisches Lexikon, Band II, Georg Olms Verlag, 1968, (Reprografischer Nachdruck der 4.Auflage, Leipzig, 1775), 1998, S. 949-956.
- (12) Friedrich Heinrich Jacobi Werke Band I,1, Schriften zum Spinozastreit, herausgegeben von Klaus Hammacher und Irmgard-Maria Piske, Felix Meiner Verlag, 1998, S.121-2.
- (13) Ebd., S.18.
- (14) Ebd., S.96.
- (15) Heinrich Heine, Werke in vier Bände, 3. Band, Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland, München, 1982, S.561. (ハインリヒ・ハイネ『ドイツ古典哲学の本質』伊東勉訳、岩波文庫、1973年、106ページ)
- (16) Ebd., S.585. 前掲訳書、148ページ。
- (17) 『フェードン』刊行後のドイツ思想界におけるメンデルスゾーンへの高い評価と、『イエルーザレム』刊行後の彼に対する失望については、次

- の研究書が詳しい。Ursula Goldenbaum, Kants Parteinahme für Mendelssohn im Spinoza-Streit 1786, in: Kant und die Berliner Aufklärung, Akten des IX. Internationalen Kant-Kongresses, Band V, herausgegeben im Auftrag der Kant-Gesellschaft e.V. von Volker Gerhardt, Rolf-Peter Horstmann und Ralph Schumacher, New York, 2001.
- (18) メンデルスゾーンの夢の寓意は次の箇所で述べられている。Moses Mendelssohn, Gesammelte Schriften Jubiläumsausgabe, Band III, 2, Friedrich Frommann Verlag, 1974, S.81-94. (Im Folgenden: Mendelssohn).
- (19) カントの方向問題を今日的な「世界観 (Weltanschauung)」の問題と解しているのは、次の論文である。Werner Stegmaier, >Was heißt: Sich im Denken orientieren?<, Zur Möglichkeit philosophischer Weltorientierung nach Kant in: Allgemeine Zeitschrift für Philosophie, 1992, Heft 1, Stuttgart. なお、この点については、注 (1) の Bernhard Jensen も同じ見解である。
- (20) 価値ニヒリズムについては次の研究書が詳しい。G.ベルトナー・渋谷治美編著『ニヒリズムとの対話—東京・ウィーン往復シンポジウム』晃洋書房、2005年。なお、渋谷治美は、カント哲学がスピノザ主義と対決しているという解釈しているが、その際スピノザ主義を、自由を否定する哲学としてのニヒリズムと見なしている。
- (21) カントの言及によると、ヴィーツェンマンはDas deutsche Museumという書誌の1787年2月号でカントによる「理性の要求」の説明を批判している。Vgl. Kant, Kritik der praktischen Vernunft, IV 143-4.
- (22) Wizenmann, Resultate der Jacobischen und Mendelssohnschen Philosophie: kritisch untersucht von einem Freiwilligen, Leipzig, 1786. (Texte zum Literarischen Leben um 1800, herausgegeben von Ernst Weber, Hildesheim, 1984) S.7.
- (23) Ebd.
- (24) Ebd., S.81-2.
- (25) Mendelssohn, Band 7, 1974, S.10.
- (26) Mendelssohn, Band 24, 1997, S.187.
- (27) Lexikon der Aufklärung, Deutschland und Europa, herausgegeben von Werner Schneiders, Verlag C.H.Beck, 1995, S.372.
- (28) Norbert Hinske, Die Aufklärung und die Schwärmer - Sinn und Funktionen einer Kampffidee, in: Die Aufklärung und die Schwärmer, herausgegeben von Norbert Hinske, Hamburg, 1988.
- (29) Heine, S.583. (前掲訳書、144ページ)
- (30) Heine, S.582-3. (前掲訳書、144ページ)
- (31) 安酸敏眞『レッシングとドイツ啓蒙—レッシング宗教哲学の研究』創文社、1998年、283ページ。
- (32) Jacobi, S.120.

(2005. 9.16 受稿)